

神の手を持つ彫刻師 シャルー 瞎呂

任瑞玗

(訳 富永涓子)

中華民国初年、貴州省に戦乱を逃れて一人の工芸職人がやってきた。その人物は背が低く単衣の薄い服を着て、しかも片方の目が見えなかった。彼はこの地にやって来たのではあるが親戚縁者は一人もおらず、腹を空かせ金も持っていなかった。見ると彼は片方の目であちらこちらと見まわした後、付近の山道から小石をいくつか拾ってきて、小刀でその上に絵を彫った。またたく間に本物そっくりの白菜、バッタ、小さな花が小刀の下から現れてきた。

周りで見物していた人々はしきりに珍しいと褒めて彼にいくらで売ってくれるかと聞いた。彼はちょっと笑って、食べ物を少しと着るものに換えられればいいのですから、いくらでもいいですよ、と言った。

このようにして、彼は自分の技でこの地に落ち着いた。人付き合いがよく金にも物にもこだわることなく、彫り物を頼みに来る人がだんだん多くなってきて、みんなはやがて彼の名前が呂だということを知ると、率直な言い方で瞎呂シャルー〔「盲目の呂」という意〕と呼ぶことにした。

瞎呂シャルーの評判が広がるにしたがって、方々から玉ぎよくを扱う商人が彼に大きなものを彫ってもらおうと訪ねてきた。ある時、彼に千手観音を彫らせようと雲南の商人が大きな玉ぎよくを運んできた。瞎呂シャルーはフッフッとちょっと笑って、今回はたくさん頂かなくてはね、と言った。

その商人は即座に千元の銀貨を投げ出して、「これは手付金で、もし出来がよかったらさらに二百元出そう」と言った。

周りで聞いていた人々は、これで瞎呂シャルーは金持ちになったと話した。

二か月後商人が金かねを持ってきて、見るとその千手観音はきらきらと透き通るよ

うに輝き、慈悲深い顔つきだった。手の形が異なり、それぞれの手は法器を持っていた。胸の前の手は柳の枝を軽く持ち、枝の表面には水滴がきらきらと光り、柳の葉のかぐわしい香りさえ漂ってくるようだった。今回のことで彼の名声は更に広がり、人々は彼を尊敬し「神の手を持つ彫刻師^{シャルー}瞎呂」と呼ぶようになった。

その年の冬、天気はことのほか寒く、牡丹雪が三日三晩降り続き、天も地もすっぽり覆ってしまった。このようなひどい天気の中で^{シャルー}瞎呂は持病が出て、全身骨の髄まで焼け付くように痛みで、ベッドの上で何度も寝返りをうち眠れず、絶えず口の中でかすかに唸っていた。

突然外から激しく門を叩く音が伝わり、彼はひどく痛む身体をひきずって門を開けると、都市管理員の^{ホウサン}候三が数人の兵隊やくざを連れて押し入ってきた。

候三は怖い顔をしたいかつい男で、ふだんから不正なことばかりをしていた。妻と都市防衛長官がねんごろな関係であるのを利用して、役所での管理の仕事をいいかげんにごまかしてしていた。彼は^{シャルー}瞎呂が口を開くのも待たずに口元の髭をつまみながら作り笑いをし、「今日は防衛長官さまの誕生日で、以前からお前の優れた技^{わざ}を耳にしておられたので、大きくはばたいている鷲の像を雪で彫らせ酒席の一興としたいと、わざわざお前を連れて来るようにと命じられたのだ。お前はなんという果報者か！」と言い終わると、ハハハと大きな声で笑った。

彼はその話を聞くや力なく手を振って、かぼそい声で「何日か延ばせませんか？ 私は最近身体が悪く、彫り物をする力がないのです」と言った。^{ホウサン}候三は呂が行きたくないというのを聞くやいなや顔つきが一変して、大声を出して、せっかくとりたててやったのに好意を無にするのか、と兵隊たちにさっと目配せをして、「呂さまは身体の具合が悪くて歩けないそうです。みなさん、手伝っててください！」と言った。すかさず数人が連れ立って、まだ服もきちんと着ていない^{シャルー}瞎呂を引きずっていった。

雪はますます強くなり、刃のような風が彼の目に突き刺さり、手足がこわばった。防衛長官の家に着くころには眉には氷柱がぶら下がっていた。ホールの中は非常に明るく、いくつかの大きなテーブルではちょうど酒を飲んで猜拳(1)をやっていた。防衛長官は^{シャルー}候三が^{シャルー}瞎呂を連れてきたのを見ると、中に入ってまず身体を温めよ、とも言わず、大声で、ただちに庭に雪を積んで彫れ、と叫んだ。

^{シャルー}瞎呂は凍りついた雪の地面に立ち、こわばって震える手でひとすくい、ひとすくい雪を積み重ね始めた。寒風の中、絶え間なく候三や長官の酒を飲みながら

卑猥な話を楽しんでいるのが伝わってきた。

瞎呂^{シャールー}は溢れ出る怒りに耐えて、ひと彫り、ひと彫り雪の中で彫り始めた。どれほど時間が経ったのか分からないが、彼がいないのに誰かが気がついた、庭には一体の勇壮な雪の鷲が残されていた。見ると鷲は目も口も鋭く羽を広げて飛び出す様子で、爪は何かをつかんでいるようだったが、風雪が強くて誰もそれに注意しなかった。ホールにいる者たちは食べたり飲んだりしていたが、腹いっぱい飲み食いすると、みんな次々と家へ帰って寝入った。

次の日まだ夜が明けきらない時、候三^{ホウサン}の女房が突然叫び声をあげ、町中に響き渡った。もともと彼女は長い間長官とは懇ろな間柄で、人の目を避けてこっそりと、毎日深夜に長官の家へ行き、寝てから、あくる朝早く夜の明けないうちに候三の家へ帰っていた。その日の早朝もこっそりと候三の家へ帰ってくると、いつもの彼の鼾が聞こえないのでベッドの傍へ行き、候三は昨夜飲み過ぎたにちがいないとぶつぶつと言いながら、ふとんをめくりあげて、そっともぐりこんだ。なんと布団の中は全く温もりがなく、しかも探りよせた候三の身体は冷たく硬直していた。思い切って明かりを近づけてみると、彼は真っ赤な目を見開いて、すでに死んでいた。

防衛長官は知らせを聞いて、慌ただしく兵士たちを連れてやって来た。候三のすっかり冷たくなって濡れた身体を見ると、胸や背中に無数の引っ掻き傷や齧られた跡があり、その上、目は片方が啄まれていて、すでに死んでから時間が経っていた。一人の目ざとい古兵士が思わず「ええっ」と声を上げた。「この引っ掻き傷、鷲の爪跡みたいで、それに候三の身体にこんなにたくさん氷水がある。まさかあの氷の鷲がやったんじゃないだろうか」と言い終わると、驚き怖れた。

この都市防衛長官は軍隊上がりで、もともと迷信を信じてはいなかったもので、仲間たちを連れて家の庭の彫られた鷲の像のほうへと向かった。遠目でもう、鷲が口に血の塊らしきものをくわえている様子が見分けられ、近づいて見て、驚きのあまり三歩退いた。なんと鷲の口の中には本当に血にまみれた一つ目の目玉があった。彼が思い切って鷲の爪の下をのぞいてみると、昨夜ははっきりわからなかった物がついにまざまざと現れ出てきた。それは人の形のような彫り物で、よく見ると、外観はなんと候三とそっくりではないか……

長官はこのことはきっと瞎呂^{シャールー}と関係があるにちがいないと考え、兵士に彼を縛り上げてくるようにと叫んだ。ほどなくして、捕まえに行った兵士が息を切ら

せて戻ってきて話したことには、彼の家はとっくに雪で塞がり、手りゅう弾を爆発させて家の入口を開けたが、中は空っぽで瞎呂^{シャーラー}の影もかたちも見当たらなかった、ということだった。

長官は聞くや否や、前後の見境もなく大声で「俺様がこの鷲をぶっ壊してやる！」と言って手招きした。数十人の兵士たちが集まり、彼らといっしょになって足や銃で雪の鷲を壊しにかかった。ところがどういうわけか、雪の鷲はまるで鉛を流し込んで作られたかのようにびくともしなかった。長官は両眼を真っ赤にして大声で叫んだ。「みんな離れろ、見ておれ、俺様の手りゅう弾一発であれを吹っ飛ばしてやるからな。」

手りゅう弾は雪に覆われた地面に鈍く響き、周囲に叫び声が伝わったあと静まり返ったが、その雪の鷲は依然として少しも損なわれることなく完全な姿で立っていた。鷲の近くには、爆発で皮がはがれ肉が裂けた長官と兵士たちが入りみだれて倒れていた。実は投げられた手りゅう弾はすべて雪の鷲の硬い身に跳ね返されて、逆に手りゅう弾を投げた本人と兵士たち全員が爆死してしまったのだ。

手りゅう弾の炸裂する音を聞いた人々がかけつけてきて見ると、防衛長官の屋敷の庭はすでに静まり返っていた。聞こえてくるのは、雪で覆われた地面に鷲の目の中から滴り落ちてくる赤い血のポタリポタリという音だけだった。

だれかが「おい、見ろよ、鷲が融けはじめたぞ」と言った。だが小さな子供がぽつりとか細い声で、「融けてるんじゃないよ。瞎呂^{シャーラー}を探し出せないから、それで泣いてるんだよ」と言った。

その後、神の手を持つ彫刻師瞎呂^{シャーラー}は謎のように消えてしまい、人々が再び彼を見ることはなかった。

- (1) 猜拳……酒席での遊びの一種で、二人が互いに片手の指で数を示すと同時に双方の出した数の合計を言い、当たった方が勝つというルールで、負けた方が罰として酒を飲まなければならない。

(『中国微型小説排行榜(2012)』百花洲文芸出版社，南昌市，2013，pp. 338-341.)

（中国語原文）

神雕瞎吕

任瑞玕

民国初年，在黔州地区来了一位逃难的手艺人。此人身材短小，衣衫单薄，且有一眼落下残疾。他来到此地，一无亲二无戚，饥肠辘辘，身上又无半文钱。只见他用仅有的一只眼左看看右望望，然后从附近的山路上捡起一些小石块来，用一把小刀在上面刻刻画画的。不一会儿，一颗小白菜、一只小蚂蚱、一朵小花就在他的刀下栩栩如生地展现出来。

围观的人们啧啧称奇，问要多少钱才卖。他笑了笑说，随便给点就行了，拿点吃的穿的来换也成！

就这样，他靠着自己的手艺在这个地方安顿了下来。他为人人随和，又不计较钱物，找他雕东西的人也就越未越多，大家也慢慢知道了他姓吕，后来就干脆叫他瞎吕子了！

随着瞎吕名气的增长，有一些外地的玉石商人也专程跑来找他雕些大件的物品。 有一回，滇漠大商运了块大玉过来，让他雕一尊千手观音，瞎吕呵呵一笑，说这回可得多收点钱了！

那大商二话便扔下一千块大洋，讲明这是首期款，如果雕好了再两百块大洋。

旁人听了伸了伸舌头，说，这下瞎吕可发了！

丙个月大商来提货，只见那千手观音晶莹剔透，慈眉善目。每一只形态各异，还各拿一件法器。在胸前的那一只手则轻挽柳枝，上面水珠莹莹，甚至还有人闻到了一些柳叶的清香味。瞎吕这回的名气就更大了，人们都改口尊称他为“神雕瞎吕”。

这一年冬天，天气格外冷，鹅毛大雪一连下了王天三夜，把个天和地都盖得严严实实的。在这样的鬼天气里，瞎吕的老毛病又发作了，全身的骨头痛得像火烧一样，他躺在床上翻来覆去的睡不着，口中还时不时地轻声哼哼着。

突然口外传来了一阵急促的敲门声，瞎吕拖着酸痛的身子把门打开，城

区管办侯三带着几个兵痞子闯了进来。

侯三长得贼头鼠脑的，平日里尽做偷鸡摸狗的事，仗着老婆和城防长官有那么一手的关系，也混了个管办的差事。他不等瞎吕开口就拈着嘴角边的一撮毛，皮笑肉不笑地说道：“今几个城防大人过生日，他早听说你小子有非凡的雕刻手艺，特让我来请你上府，雕一尊雪雕展翅，以助酒兴。这可是你瞎吕的造化呀！”说罢嘿嘿地干笑了几声。

瞎吕一听，轻摆无力的手，用微弱的声音说道：“能不能缓几天呀？我最近身体不舒服，没有力气来雕刻。”那侯三一听瞎吕不想去，马上嘴脸一变，破口大骂瞎吕不识抬举，然后拿眼色向那几个兵痞子一使，说：“老吕他身子不爽，走不劫，哥几个就帮帮他的忙吧！”说罢几个人连拖带拉地把衣服都还没穿好的瞎吕给抓走了。

雪越下雪大，像刀子一样的风把瞎吕吹得两眼发直，四肢发僵。当他来到城防长官的府里时，双眉已挂起了冰珠子，大厅里灯大通明，几大桌人正在上面喝酒猜拳。那城防长官看见侯三把瞎吕给带来了，也不叫他进来先暖暖身子，就叫嚷着让瞎吕在院子里马上开始堆雪雕。

瞎吕立在冰大雪地之中，用僵硬颤抖的手一捧捧地把雪堆了起来。寒风中不时传来侯三和城防长官喝酒作乐的淫词浪语。

瞎吕忍着满腔的怒火，一刀一刀地在雪地里雕刻起来。也不知过了多久，有人发现瞎吕不见了，院子里只留下一尊雄伟的雪雕，只见那雪雕犀眼利嘴，展翅欲飞，一只爪里好像还抓着个什么东西，因风急雪大也没人太注意。厅上的人就继续喝着，酒足饭饱之后，众人纷纷回屋睡觉去了。

第二天还没大亮时，侯三他老婆突然惊叫，响彻了整个城防府。原来这侯三的老婆长期和城防长官有那么一手，为了掩人耳目，每天都是深夜到城防长官的房里睡，然后又在第二天不亮时回到侯三的房里。这天早上她又偷偷摸回侯三房的时候，没听到往常侯三打呼噜的动静声，她走到床边，嘴里一边念叨着侯三是不是昨晚喝多了，一边用手掀开被子，猫着身子钻了进去。没想到被子里一点热气都没有，而且她摸到侯三的身子居然是僵硬冰凉的，她大着胆子借着亮光凑近一看，那侯睁大着血红的眼睛，已死了。

城防长官得知消息，赶忙带着一队兵就跑了过来，只见侯三光着冰湿的身子，前胸后背有无数被抓咬过的痕迹，而且眼睛还被啄去了一只，人已是死去多时，有一个眼尖的兵痞嘴里不觉咦了一声，说这抓痕好像是雕的爪印，

而这侯三身上又有那么多的冰水，难道是那只冰雕干的？说完害伯地吐了吐舌头。

这城防长官是行伍出身，根本不信这个邪，带着弟兄们就朝自家院子的雪雕走去。还没走到跟前，就发觉那雪雕的嘴里好像是叨了个什么血球子，走进一看，城防长官吓得倒退了三步，原来那雪雕的嘴里真有一只血肉模糊的眼珠子。他再大着胆子往雪雕的爪子下望去，昨夜那看不清的东西终于展现了出来，是一个人形模样的雕塑，再仔细一看，那人的外形可不足和侯三一模一样吗……

城防长官心想，这肯定和瞎吕脱不了关系，便咆哮着叫士兵把瞎吕给绑来。没过多久，去抓人的兵就气喘吁吁地跑来回话，说瞎吕的屋子早已被雪给封住了，他们用手榴弹炸开房门后，里面空无一个，不见瞎吕的踪影。

那城防长官一听，气急败坏地嚷道：“把这个雪雕给老子砸了！”说罢手一招，上来了数十个兵痞子，一起用脚用枪去推去砸那雪雕，不知为什么，那雪雕就像是灌了铅似的纹丝不动。城防长官双眼冲血，大喊一声：统统给老子闪回来，看老子一手榴弹给它炸飞了不可。

手榴弹在雪地里一声闷响，四周传侍来几声号叫之后就静了下来，那雪雕仍然完好无损地立在雪地上。离雪雕不远的地方，横七竖八地躺着被炸得皮开肉裂的城防长官和他的兵痞子们。原来是那根扔过去的手榴弹被雪雕坚硬的身子反弹了回来，反而把扔手榴弹的人和他的兵痞们全炸死了。

听到爆炸声的人们寻声跑来一看，只见那城防大院内早已是死寂一片。唯一能听到的声音，就是从雪雕眼里滴下来的血红水珠落在雪地上发出来的滴答声。

有人说，快看，这雪雕开始融化了。而一个小孩子却嫩声嫩气地说道，这雪雕不是化了，它是在哭。它找不到瞎吕了，所以它哭了！

从此，神雕瞎吕神秘地消失了，再也没有人见过他。

□□□□□